

日本キリスト教団藤沢教会 2021年7月18日

## マタイによる福音書 5:1~12

隣のお宅の庭にカラスが巣をかけているのをご存じでしょうか。園庭にやたらいろいろなものがぶら下がっているのはそのためです。ただ、それがカラスを刺激したのでしょうか。下にいる者を威嚇するのですが、カラスもむやみに人を威嚇するものではありません。威嚇するのは子育て中で気が立っているからでもあります。あちらは子育て、こちらは保育と、こうしてお互いの利害がぶつかり合うところで摩擦が生じることとなりました。このことはつまり、それぞれの目的は一にしつつも、カラスと教会の関係性は限りなく遠いところに立っているということです。ですから、一触即発、いつ不測の事態が生じてもおかしくはありません。しかし、幸いなことに全面戦争へと発展するまでには至りませんでした。それは、カラスの雛の巣立ちが近いことを知って、職員たちの気持ちと和らぎ、それどころか、やっぱり保育者なんですね。巣立ちを楽しみにし、気遣うまでになったのです。ですから、以心伝心と言うことなのでしょう。こうして緊張はほぐれ、カラスとの全面戦争は回避されることになったのですが、ただ、そこで改めて思ったのです。それは、互いの事情をそれぞれ知って触れることの大切さです。つまり、何か課題が生じたときには、気持ちに流され、溺れたままではなく、「正しい」事実認識とそのため視点の大切であるということです。そして、それは、私たちが御言葉を理解する場合においても同じです。

ところで、私たちがこうして御言葉に聞いていくことは私たちにとってどういう意味を持っているのでしょうか。特に、先週からしばらく、私たちは山上の説教と呼ばれるイエス様のお言葉に聞いていこうとしているわけです。そして、この山上の説教については、私たちがこれまで繰り返し繰り返し何度も聞いてきたわけですが、その私たちが再びこの御言葉の前に立つというのはどういうことなのでしょう。それは、御言葉が発する問いの前に私たちが立たされているということです。そして、それが山上の説教を通してこれまで繰り返しなされてき

たわけですが、私たちが繰り返しその問いの前に立ち続けてきたのは、私たちがそれだけ神様とイエス様のことをお慕い申し上げているからです。それゆえ、この度は是非答えを手にしたと、そう意気込んでおられる方もいらっしゃるでしょう。ですから、私もなんとかその一助たりえればと願うばかりではありませんが、ただそれには何かが変わらなければなりません。今までと同じことの繰り返しの中では、結果は何回やっても同じだからです。でも、神様とイエス様を変えることはできません。それゆえ、もし変わるとしたら、それは私たちです。私たちが自身が変わらなければならないのですが、これまで何度も何度も変わりたい、変わらねばと思ってきたのが私たちでもあるわけです。そして、その解決方法については、私たちにもよくよく分かっています。それゆえ、山上の説教を巡っては、そこに私たちの信仰の歴史が現されているとも言えるのでしょうか。

しかし、先週もお伝えしましたように、その惨めな歴史は、私たちが山上の説教を理解する上での障害たり得ないということです。なぜなら、神様にもイエス様にも誇るべきものなど何もないのが私たちであるからです。私たちは、弱く、欠け多い者でしかなく、けれども、その私たちとイエス様は現にこうして共にいてくださっているのです。しかも、その心貧しき私たちのことをイエス様は幸いであるとも仰って、その上で天の国はその私たちのものとまで仰るのです。それゆえ、山上の説教とは、この事実、前提に立って聞いていくべきものでもあります。それは、それが聖書が語る伝統的メッセージでもあるからです。そして、このことはまた、人間を理想化せず、堂々と罪深い人間について扱っているのが聖書の御言葉であるということです。そして、それは、イエス様についても同じです。イエス様をメシアとして持ち上げて理想化するどころか、私たちと同じ人間の姿をもって、私たちとどこまでも同じものとして、御言葉はイエス様のメシア像を示すのです。ですから、そのイエス様が私たちに向かって「幸いな

るから。心の貧しき者は」と語るわけですから、それは全くの真実であり、それゆえ、御言葉は私たちの手の届かないものではありません。では、これから数週間、私たちはこの前提にしっかりと立って御言葉に聞いていく中で、そこで私たちが知らされる事実関係、はつきりと知らねばならない真実とはどういうものなのか。私たちがもし自分自身を変えることができるとしたら、このことへの気づきが私たちをして私たちが自身を変えさせることにもなるのでしょう。

そこで、心の貧しき私たちが次に聞く言葉は「悲しむ人々は幸いである。その人たちは慰められる」というこの御言葉です。それゆえ、これを聞き励まされ、慰められる人は多いことでしょう。私たちの日常には辛く悲しい出来事があまりにも多いからです。しかし、ふと我に返ったとき、私たちはその気持ちをどこまで保ち続けることができるのでしょうか。大切なものを失った者にとっての慰めは失ったものを再び手にすることで。けれども、イエス様のこの約束が果たされないと知ったとき、そこで私たちは何を思うのか。それは、一緒にいるはずのイエス様がいないということです。ですから、それに気づいたとき、それ以上の闇の奥深くを覗き込む勇気は私たちにはありません。そこで、私たちは気持ちに蓋をして次のイエス様の言葉に目を移すのです。では、次に語られていることは何か。それは、「柔和な人々は幸いである。その人たちは地を受け継ぐ」というこの力強いイエス様の言葉です。それゆえ、私たちの多くはまたこの言葉に強く心引かれることになるのです。それは、ここに私たち誰もが求める一つの信仰者像があるからです。ただし、それは、多くの人々にとって繰り返し挫折させられてきたことでもありました。そもそのところでは、このお言葉に聞いた時点で、挫折は始まっていたことでもあります。ですから、私たちがイエス様のお言葉に心引かれながらも、柔和な振りすらすることができないのはそのためです。まただから、この柔和さを私たちは喉から手が出るくらい欲しいと思ってしまうわけですから。それは、あらゆる関係性をより良くするものがこの柔和さであることを知っているからです。けれども、そこでまた知らされるのです。柔和であるところからいかにほど遠いところに自分は立っていると、そして、イエス様はその私たちとは共にいてはく

らないと、そう強く思わされる、それが私たちでもあるからです。

そして、あろうことか、そのことを知らしめるのが山上の説教であり、聖書の御言葉もあるのです。このことはつまり、聖書の御言葉もイエス様のお言葉も、私たちににとっては遠いものであり、つまりは、まったく異質なものだということ。そして、それは、今この二つのことだけを見てもこのように言えるわけですから、他の一つ一つのことを見ていくなれば、なおのことです。つまりは、私たちの想像を絶するほどの隔たりを感じさせられるのがこの山上の説教であるということです。ただ、私たちにそれはすらも素直に言葉にする勇気はありません。それは、自分自身への後ろ暗さからではありません。その異質さに魅了されているのが私たちでもあるからです。そのため、私たちは受け入れやすい形イエス様のお言葉を理解しようとするのです。例えば、7節の「憐れみ深い人々は幸いである。その人たちは憐れみを受けるとあるこの言葉がそうです。柔和であることも、憐れみ深いことも、人間として生きる上での一つの徳目として理解することができるのですが、ただし、モラル、道徳として理解することは、それができる場合もあればできない場合もあるわけですから。つまり、それはいわば努力目標に過ぎないことにもなるわけですから。けれども、イエス様が山上の説教を語るのには、それを一つの徳目、身につけるべき道徳的たしなみとしてではありません。すべては、イエス様と共にあるがゆえのことであり、このことはつまり、イエス様と共にあろうとする私たちにあっては、そういう意味では有無を言わさない形で求められているものだということ。まただから、御言葉に従う私たちはイエス様の言葉に励まされ、慰められ、大いに喜びを感じることもなるのです。

ところが、その私たちがイエス様のこの一連の言葉を聞いて、自信を深めるどころか、自信を失ってしまう。それは、語られている事実と私たちが感じる事実との違いがあるからです。つまり、イエス様が見て欲しいと思っていることと、私たちが見たいと思っていることとの視点の置き方の違いです。ですから、山上の説教において語られていることに私たちが時に鈍感でいられるのはそれゆえのことでもありますが、ただ、この事実は私たちをやがて悲しませることにもなり

ます。しかし、それを責めることのできる者はイエス様以外にはおりません。それゆえ、その悲しみが真面目な信徒への同調圧力となって作用するとしたら、それはもっと辛く悲しいことでもあるでしょう。けれども、その逆に、自分を棚上げにして、イエス様の言葉を振りかざし、他者に対してのみ厳しい態度で臨んだとしたら、そんな恥知らずなこともありません。しかし、そうした悲しむべき歴史、恥を知らない歴史の中にあっても、11節に「私のために罵られ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである」とあるように、私たちのこれまでの歴史の中には、イエス様が語る幸いに生き、喜びの中に召されていった人々もまた確かに存在しているのです。それは、イエス様が「喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある」と仰っているこの言葉を心から真に受け、この言葉に生きた人々が現にいたからです。

ですから、それを考えれば、私たちに求められていることははっきりしています。やはり二つに一つ、それをやるかしないかということです。そして、そこで私たちが見つめるべきものが先週申し上げた主イエスと共に、イエス様にあつて、というこの視点でもあるのです。それは、11節以下にあるようにイエス様を体現することこそが私たちの信仰をこの世にあって意味あるものとするからです。ところが、その私たちがイエス様が仰ることをイエス様と一緒にしようとする、どうしても体が強ばってしまう、それはどうしてなのでしょう。まただからなのでしょう。私たちが真実を誤魔化し、一步を踏み出すことができずにいる自分自身への言い訳ばかりを口にしてしまうのは。しかし、そこで私たちは忘れてはなりません。それにも関わらず、繰り返し繰り返し山上の説教を私たちに語り続けるのがイエス様でもあるのです。それは、イエス様が私たちの言い訳や誤魔化しを喜んではいないからです。ただし、それについては私たちにもしっかり分かっていることです。分かっているが、ここでイエス様が語る真実、事実を受け入れることができない。つまり、分かっちゃいるけど止められない、それがイエス様の前にある私たちであるということ。けれども、そのことをいくら強く責められたところで、この自分自身を自分の力で変えることはできません。

変えられるくらいならとっくの昔に変わることができたからです。しかし、それにも関わらず、イエス様は繰り返し繰り返し私たちに変わることが求めておられる、少なくとも私たちはそう思っているのです。

私たちがそう思うのは嘘ではなく本当です。あのユダですら自らの行為を恥じたように、私たちが最初から諦めていたとしても、私たちの多くはこのままでいいとは思っていないのです。ですから、心のどこかに、このままではいけない、このままではダメだ、そんな気持ちを持っているのでしょ。けれども、それを心の奥深く、見えないところにしまい込んでいるのが私たちでもあるのです。ただ、それがもし私たちの真実な姿であるとしたら、それはとても悲しいことです。ましてや、それが私たちの信仰であるとしたら、私たちの信仰とは実につまらないものだとも言えるのでしょ。それこそ、自分を誤魔化し、もっともらしい言い訳の口実を与えるものが私たちの信仰ということになってしまいます。しかし、その私たちのことを召し、その私たちに向かってなお語り続けておられるのが私たちのイエス様でもあるのです。ただ、そこで露わにされるものがあります。それが私たちの過ちであり、弱さであり、罪深さでもあるのです。私たちがそれを隠そう隠そうとしてしまうのはそのためです。イエス様はその全てをご存じであるにも関わらず、私たちはそうしてしまうのです。それは、私たちがそういう自分自身を受け入れることができずにいるからです。そして、それは、私たちが自分自身に対し誠実でありたい、あらねばと思っているからです。けれども、私たちに求められていることは神様に対する誠実な姿であつて、そういう自分自身に対してではありません。それは、功しない自分自身に対して、私たちにもっと堂々として欲しいというのが神様の御心でもあるからです。ただし、それは、主にあって、主と共にという、この一点においてのことなのです。

今ここで、イエス様の前にあつてそのお言葉に聞いている人たちはどのような人々なのでしょう。それは、イエス様と出会って間もない人々です。つまり、全てが未熟で何も分かっていない人々です。このことはつまり、未熟で、稚拙で、それゆえ、愚かで、恥知らずな、イエス様の御前にある人々とは、このようにあらゆるところに深い罪を認めること

のできる人々であるということなのです。ですから、イエス様の前にある人々は、私たちと何一つ変わりません。けれども、この右も左も分からない人々にイエス様は大切なことを語るのです。それが山上の説教であり、それは、この山上の説教を通して私たちがイエス様の姿をより鮮明に知ることになるからです。そして、それは、その一言一言を通して人々にイエス様を体現して欲しいからでもあります。イエス様を体現する私たちに、世の多くの人々と信じることの喜びを分かち合ったい、この強い思いがあるからです。そして、その強い思いを神様から与えられたのがイエス様でもあります。このことはつまり、この神様の御心がイエス様をして人々に山上の説教を語らしめたということなのです。それゆえ、山上の説教は私たちを卑屈にさせたり、あるいは、調子に乗らせたりすることはありません。イエス様の側にいる、近くにいる、この熱い思いをもって私たちが御国へと導くために語られたものが山上の説教でもあるからです。ですから、これから私たちが聞いていくことは、そういう意味でのイエス様の私たちに向けられた熱い思いでもあるのです。ただ、それは私たちにも分かっています。だから、そこに記されていることの多くを私たちは「なるほど」と思うことができるのです。けれども、その私たちがどうしてそれを「どうして、なぜ」と思ってしまうのか。それは語られている事実認識について、つまり、その見るべき視点が間違っているからです。

私たちにとっての一週間の始まりは、こうして集められている主の日です。日曜日が私たちの時間感覚の基であり、つまりは、ここから築き上げられるものが私たちの人生でもあるのです。けれども、7日の中の6日間は私たちにとって心地いいばかりのものではありません。その未熟さと罪深さゆえに、追われるような毎日を過ごしているのです。ですから、その私たちがこうして主の御前に集められれば、そこでどういうことが起こるのでしょうか。それは、主と共にというところから御言葉に聞くのではなく、一週間に積み重なったそれぞれの心の中にあるものから御言葉に聞いていこうとするのです。けれども、それは、買い物ついでに御言葉に聞いているのと何が違うと言うのでしょうか。ただ、それも私たちの日常であり、この日常の中にこ

そ、共にいてくださるのが私たちの神様とイエス様でもあるのです。ならば、私たちはどうすればいいのか。ここです。ここなのです。

主の日が安息日と言われているように、日曜日は主の御前で静まるときなのです。何かを成し遂げようとしたり、何かを掴み取ろうとしたり、そういう自己実現の場ではないのです。ですから、私たちが神様の御前で堂々としていられないのはそれゆえのことでもあるのでしよう。なぜなら、弱い自分、愚かな自分、罪深く不信仰な自分を変えたい、変えなければと思っているからです。そういう自分自身を誰でもない私たち自身が受け入れることができないからです。まただから、見るべき視点を見誤ってしまう、それは私たちが見るべき所とはまったく正反対の方向を見ているからです。ですから、私たちは御前にあっては心静かに神様とイエス様のみ声だけに耳を傾けなければなりません。そして、山上の説教を聞く場合においては、特にそのことが求められているのですが、まただから、そのことに気づいた私たちは、気がつけばイエス様を体現する者へと変えられていくのです。ですから、御前に立つ私たちとは、何かを成し遂げた者でもなく、また、成し遂げようとしやかりきになっている者でもありません。御前に堂々と静まることのできる者であるのです。そこで、最後に申命記の次の言葉を皆さんにお伝えしたいと思います。主なる神様はこう語ります。「わたしが今日あなたに命じるこの戒めは難しすぎるものでもなく、遠く及ばぬものでもない。それは天にあるものではないから、「だれかが天に昇り、わたしたちのためにそれを取って来て聞かせてくれれば、それを行うことができるのだが」と言うには及ばない。海のかなたにあるものでもないから、「だれかが海のかなたに渡り、わたしたちのためにそれを取って来て聞かせてくれれば、それを行うことができるのだが」と言うには及ばない。御言葉はあなたのごく近くにあり、あなたの口と心にあるのだから、それを行うことができる。」イエス様はこの神様との近さを私たちに伝えてくださっているのであり、私たちが体現すべき事はこの近さでもあるのです。そして、事実、イエス様と共にある私たちにとって、神様は直ぐ近くにいますお方でもあるのです。祈りましょう。

